

3. 住民主体による持続可能な地域づくりを目指して

松本市地域づくりインターン第3期生・中山地区担当 北原 保奈美

1. はじめに

1-1 研究背景

近年、「地域づくり」という言葉をさまざまなところで耳にする。国や自治体による行政計画をはじめ、企業や市民団体によるイベント、あるいは教育現場など、さまざまな場所で「地域づくり」という言葉は用いられている。また、総務省による地域おこし協力隊など、地域外の人材を地域社会の新たな担い手として受け入れ、地域力の維持・強化を図るための取り組みも進められている。

松本市では、地域づくりを「安心して、いきいきと暮らせる住みよい地域社会を構築するために、住民が主体となって地域課題を解決していく活動や取り組み」としており、住民自治、地域の教育力、地域連携といった「地域力」の向上が、松本市の将来の都市像である『健康寿命延伸都市・松本』の土台をつくとされている。そして、平成27年度からは「地域づくりインターンシップ戦略事業」の取り組みが行われており、若者が地域づくり活動に参加することで地域活動が活性化することと、若者が地域での活動を通して成長することを支援していく事業として、松本大学と協働して実施されている。

わが国においては、超少子高齢人口減少社会の進展に伴う社会経済状況の変化などを背景に、とくに地方における中山間地では、地域における見守りや災害時の助け合い、自治活動の継続、若い世代への文化の継承などの困難、あるいは空き家問題や遊休農地の増加など、課題が複雑化・増大化している。そこには、人間関係の希薄化や地域活動への無関心などもみられ、地域コミュニティは厳しい状況にある。

筆者の担当している中山地区では、高齢化率が36.1%（平成30年3月1日現在）であり、全国平均よりもかなり高い数値となっている。人口減少は顕著に現れていないものの、中山地区は市街化調整区域のため人口流入が難しい地区でも

あり、近い将来には更なる高齢化と人口減少が予想される。このことにより、地域におけるさまざまな活動の担い手が不足し、地域コミュニティの維持が困難になっていくとともに、空き家や遊休農地の増加といった環境的な問題もより増えていくと考えられる。

このような課題や問題に向き合い、いつまでも住み慣れた地域で安心して暮らし続けるためには、既に存在しているコミュニティと地域づくりの活動をつなぎ、それらが連携し合いながら地域づくりを行うことが必要になると思われる。つまり、地域全体が一体となった持続可能な地域づくりが必要になり、そのためには身近な資源を掘り起こし、地域における人と人、人と資源、資源と資源をつなぎ、有機的な連携を図っていくことが必要であるといえよう。

1-2 研究目的

こうした持続可能な地域づくりを進めていくためには、まず住民同士のつながりをつくる必要があると考える。地域の中には、町会をはじめ、伝統的な自治組織が存在し、それらは地域住民をつなぎ、さまざまな地域課題に取り組む中で地域コミュニティを維持してきた。一方で、そうした伝統的な自治組織とは別に、高齢者の元気づくりや、地域福祉の推進、防災など地域づくり活動を行っているさまざまな組織や団体も存在している。しかし、こうした組織・団体の中には町会長や、民生委員などの地区の役員が兼任し活動を展開している団体も多く、高齢化に伴い地域づくりに取り組む人材が限られてきていることも課題となっている。

持続可能な地域づくりを進めていくためには、こうした既存の組織や役員の人たちの活動に加えて、これまであまり地域の活動に関わりがなかった住民が自分たちの暮らす地域に関心を持ち、地域におけるさまざまな活動に取り組むことができる仕掛けを作っていく必要があると考える。

そこで本研究では、まず中山地区がこれまで行ってきた地域づくり活動を振り返るとともに、地域の資源の再発見や、新たな人材の発掘、また地域づくりにおいてさまざまな住民を巻き込んでいくコミュニティの推進について、地域づくりインターンとしての取り組みから実証的に検討していく。

1-3 問題提起

では、コミュニティとはそもそもどういったものなのだろうか。広井良典(2009.P11~21)はコミュニティについて、次のように説明している。少々長くなるが紹介しておきたい。

「コミュニティ=人間がそれに対して何らかの帰属意識をもち、かつその構成メンバーの間に一定の連帯ないし相互扶助(支えあい)の意識が働いているような集団」とし、「コミュニティ」という時、少なくとも次の三つの点は区別して考えることが重要だとしている。それは、①「生産コミュニティ」と「生活コミュニティ」、②「農村型コミュニティ」と「都市型コミュニティ」、③「空間コミュニティ(地域コミュニティ)」と「時間コミュニティ(テーマコミュニティ)」である。

まず、①(生産のコミュニティと生活のコミュニティ)については、都市化・産業化が進む以前の農村社会においては、両者はほとんど一致していた。すなわち稲作等を中心とする農村の地域コミュニティが、そのまま「生産コミュニティ」でありかつ、「生活コミュニティ」でもあった。やがて高度成長期を中心とする急速な都市化・産業化の時代において、両者は急速に、分離していくとともに、「生産コミュニティ」としてのカイシャが圧倒的な優位を占めるようになっていった。

「コミュニティ」という概念に関して次に重要となる視点は、②として示した「農村型コミュニティと都市型コミュニティ」という視点であり、これは、人と人との「関係性」のあり方を象徴的に示したものである。「農村型コミュニティ」とは“共同体に一体化する(ないし吸収される)個人”というべき関係のあり方を指し、それぞれの個人が、ある種の情緒的(ないし非言語的)つながりの感覚をベースに、一定の「同質性」ということを前提として、凝集度の強い形で結びつくような関係性をいう。これに対し、「都市型コミュ

ニティ」とは“独立した個人と個人のつながり”というべき関係のあり方を指し、個人の独立性が強く、またそのつながりのあり方は共通の規範やルールに基づくもので、言語による部分の比重が大きく、個人間の一定の異質性を前提とするものである。「農村型コミュニティ」と「都市型コミュニティ」という対比を行った場合、日本社会(ないし日本人)において圧倒的に強いのが「農村型コミュニティ」のような関係性のあり方である。戦後の日本社会とは「農村から都市への人口移動」の歴史といえるが、農村から都市に移った人々は、カイシャと核家族という“都市の中の農村(ムラ社会)”を作っていたといえる。ここではカイシャや家族といったものが、“閉じた集団”になり、それに超えたつながりはきわめて希薄になっていった。

日本社会における根本的な課題は、「個人と個人がつながる」ような、「都市型コミュニティ」ないし関係性というものをいかに作っていかれるかという点に集約される。これからの時代のコミュニティというものを考えていく上で無視できない要因として、少子・高齢化という人口構造の大きな変化がある。この場合重要な視点は、人間の「ライフサイクル」というものを全体として眺めた場合、「子どもの時期」と「高齢期」という二つの時期は、いずれも地域への“土着性”が強いという特徴を持っているという視点だ。戦後から高度成長期をへて最近までの時代とは、一貫して“「地域」との関わりが薄い人々”が増え続けた時代であり、それが現在は、逆に“「地域」との関わりが強い人々”が一貫した増加期に入る、その入り口の時期であるにとらえることができる。こうした意味において、コミュニティの第三の視点として挙げた「空間コミュニティと時間コミュニティ」とも関連するが、「地域」というコミュニティがこれからの時代に重要なものとして浮かび上がってくるのは、ある種の必然的な構造変化であるとすらいふことができるだろう。

広井が指摘しているように、現在の日本社会においてさまざまなNPOや協同組合、社会起業家などの多様な活動・事業や実践に見られ、「新しいコミュニティ」づくりに向けた多くの試みがされている。ひとつの地区の中には、さまざまなコミュニティが存在している。そのような既に存在しているコミュニティになんらかのつ

ながりを持たせることで、相乗効果が生まれ、新たな人材、資源の発掘、仲間づくり、地域コミュニティの発展が期待されるのではないだろうか。

2. 地区背景

2-1 地区の概要

中山地区の概要
 人口:3,410人 男:1,648人 女性:1,762人
 世帯:1,364
 高齢化率:36.1%
 町会数:6町会
 (平成30年3月1日現在)

中山地区は松本市南東部に位置し、東の鉢伏山とそれに連なる峰を隔てて入山辺地区、里山辺地区、岡谷市、西は中山丘陵、南は牛伏川を挟んで寿地区、内田地区に接している。地区の大部分は中山間地であり、西端には平成に入って造成された住宅地がある。面積は21.49k㎡、人口3,410人、世帯数1,364であり、高齢化率36.1%となっている(平成30年3月1日現在)。

中山地区からはこれまで多くの土器や石器、遺跡や古墳(80基)が発見されており、約12千年前の旧石器時代の末期には当地区に人が住み、約5千年前の縄文中期には、かなり栄えていたと思われる。また、室町時代には埴原城が築城され、戦国時代には小笠原氏の配下にあったとされている。明治21年、市制町村制の公布により「中山村」が成立し、昭和29年には中山村全地区が松本市と合併した。平成元年には寿地区に隣接する丘陵地に住宅団地が造成され、平成3年には「棚峯町会」となり、和泉町会、埴原北町会、埴原東町会、埴原南町会、埴原西町会、棚峯町会の6町会による現在の中山地区となった。

2-2 中山地区地域づくり協議会について

松本市では、住民が主体となって取り組む地域の課題解決や、活性化、特色を活かした魅力ある地域づくりを推進していくための財源として、市内の35地区に松本市地域づくり推進交付金を交付している。現在、超少子高齢人口減少社会が進む中、中山地区でも少子化や高齢化、人口減少、そして、それらにともなう地域における担い手不足などのさまざまな地域の課題が浮き彫りとなっている。このような地域課題を住民が主

体となって解決していくため、松本市地域づくり推進交付金の活用も視野に入れ、平成26年9月10日に「中山地区地域づくり協議会」(以下、地域づくり協議会)が設立された。また、地域づくり協議会でさまざまな活動を行う中でその活動の継続性や新たな活動を行っていく上での目指すべき方向を統一、明確にするため平成28年6月に「中山地区地域づくり協議会基本計画」(以下、基本計画)を策定した(巻末資料6-2)。

この基本計画によれば、今後の中山地区における少子高齢化や人口減少として、年平均で約60人の人口減となり、30年後には現在の半数の人口となることが予測されている。また、10年後には住民の約半数が65歳以上の高齢者となり、30年後には約6割に達すると見込まれている。一方で、14歳未満の人口は年平均で約7人の減少となり、30年後には現在の4分の1になるとされている(表1)。

表1 中山地区人口及び今後の予測

	2016年 (H28)	2026年 (10年後)	2046年 (30年後)
人口	3,486人	2,982人	1,753人
高齢化率	34.1%	46.1%	58.8%
14歳未満人口	282人	189人	70人

出典:中山地区地域づくり協議会基本計画

また、こうした少子化、高齢化、人口減少に伴う課題として以下が示されている。

(1)少子化

- ・統廃合により保育園・小学校がなくなる
- ・親世代、若い世代がいなくなる
- ・歴史、文化が継承されない
- ・地域の活気がなくなる

(2)高齢化

- ・自治活動の衰退(維持困難)
- ・地域福祉が衰退し、相互扶助機能が働かない
- ・防災力の低下
- ・生活のすべてが他力本願、他人依存
- ・各組織の活動維持が困難
- ・人の動かないまち=過疎化

(3)人口減少

- ・空き家、荒廃農地の増加
- ・防犯上の課題拡大

- ・まちの景観、美観が損なわれる
- ・地域活力の低下
- ・生活水準の維持が困難

このような、少子化、高齢化、人口減少の3つの現状から考えられる課題が、単独ではなく、相互に影響し合うことで、問題がより深刻化する。基本計画にあげられたこれらの問題を少しでも解決していけるよう、地域の活性化、福祉の推進、防災や環境保全への取り組みが必要になると考えられる。

地域の活性化においては、どんなに歳をとっても地域のなかで自分の役割を持ちながら暮らしていけるよう、高齢者の生きがいづくりや、高齢者だけでなく子供や若者を巻き込んだ中山地区全体での元気づくりが必要になる。

福祉の推進においては、自分の足で行けるくらいの身近な場所で、気軽に集まり、気兼ねなく話ができる居場所づくりや、いつまでも安心して住みなれた地域で暮らしていけるように、見守り・支えあいの仕組みづくりを推進していくことが必要となる。

防災や環境保全への取り組みにおいては、いざという時のために防災力を身につけることや、地区の景観や美観を守るために増えつつある空き家への対策が必要になってくると考えられる。

以上のような課題等の解決に向けて地域づくり協議会では「住んで良かったと思える中山地区を目指して」を目標に掲げ、地域活性化部会、福祉対策部会、防災・環境保全対策部会の3つの部会が、課題解決や目標に向けて日々活動をしている。

3. 実践研究

地域づくりインターンとして地域づくり協議会各部会の会議や活動に参加し、また公民館や福祉ひろばなどにおけるさまざまな活動に参加するなかで、地域づくりの側面において4つの課題があるように思われた。

1つ目は、地域づくり協議会各部会の中で情報共有を図る機会が不足しているという点である。委員一人ひとりの意見や想い、それぞれの活動における困りごとなどを丁寧に掘り下げ、みんなで話し合える場が少ないように思われた。

2つ目は、地域づくり協議会として部会を超えた活動があまりなく、横のつながりが少ないため、

部会相互の情報交換が十分に図られていないという点である。他の部会でどのような活動が行われているのか共有されておらず、地域づくり協議会全体としての取り組みが把握されていない状況が見受けられた。

3つ目は、中山地区で行われているさまざまな地域づくりの取り組みが、情報として地域に効果的に発信されていないという点である。各部会の会議に出席する中で、地域づくりの活動を3年間にわたり行ってきたが、その活動自体が住民に知られていないという声が聞かれた。そのため、住民の方々にも地域づくりに興味を持ってもらえるように、地域の情報誌として毎月発信してはどうかという提案もあった。

4つ目は、地域包括ケアシステムの推進を考えるなかで、その名前だけが先走り具体的な取り組みがみえていない点である。中山地区では地域包括ケアシステムの構築に向け、地区住民の身近な取り組みとして、高齢者の現状把握や相談対応及び傾聴を行うことを目的に町会や常会ごとのお茶のみ会を推進している。これらは地域包括ケアシステムの構築だけでなく、住民同士のつながりや、町会や常会といった小さな範囲における課題やニーズの把握、資源の発掘を通じた地域づくりにつながっていくものである。そのため、お茶のみ会の実態を把握し、今後の取り組みに向けた検討が必要となってくると考えられる。

これまで述べてきた課題について、筆者が地域づくりインターンとして取り組んできた地域づくり協議会発足3周年懇談会「今までの中山、これからの中山」、情報発信のひとつでもある地域づくりニュースの発行、高齢者の居場所づくりでもある町会や常会でのお茶のみ会の実践を次に示す。

3-1 中山地区地域づくり協議会発足3周年懇談会「今までの中山、これからの中山」について

平成29年10月、地域づくり協議会が発足して3周年を迎えた。そこで、先に述べた4つの課題のうち、各部会における情報共有の不足と部会相互の情報交換が十分ではないという課題を視野に入れ、これまで地域づくり協議会が取り組んできた活動を振り返るとともに、委員それぞれの思いを出し合える機会を設けることを目的と

してワークショップを企画・提案した。

以下、ワークショップ開催までの取り組み状況、当日の様子、そしてワークショップにおいて出された意見について記す。

(1)第1回ワークショップ準備会

日時：平成29年7月11日(火) 17:00～
 場所：中山地区公民館 視聴覚室
 内容：ワークショップの内容と進め方について
 の検討
 ・部会ごとに行うのか、協議会全体で行うのか
 ・対象者
 ・日時の決定
 ・内容の決定
 ・大学教員にどのように関わってもら
 うか

第1回ワークショップ準備会のメンバーは、町会連合会長、地域活性化部会長、福祉対策部会長、中山地区地域づくりセンター長、公民館長、公民館主事、中山地区地域づくりセンター主事、福祉ひろばコーディネーター、地域づくりインターンの計9名で行った。主にワークショップの内容について検討することとしたが、町会連合会長や地域活性化部会長、福祉部会長、公民館長からは、地域づくり協議会の活動の足腰を強くさせるために情報共有が必要という声や、地域づくり協議会の基本計画の中で今までなにを実践してきたのかの整理が必要という声、また今までの活動が「住みやすい」中山につながっているのかどうか検討が必要だという声があがった。

このように、第1回目の準備会ではさまざまな意見が出たものの、ワークショップにおける具体的な内容や対象者、日時等詳細は決まらずに終わってしまった。そこには、そもそも何のためにワークショップを開催するのか、開催することによってどのような効果が得られるのかをうまく共有できていなかったからだと思われる。

(2)第2回ワークショップ準備会

日時：平成29年7月13日(木) 15:00～16:00
 場所：中山地区公民館 講義室
 内容：ワークショップの内容と進め方について

の検討

- ・日時の決定
- ・内容の決定
- ・大学教員にどのように関わってもら
 うか

第1回目のワークショップ準備会では詳細がなかなか決まらなかったため、急遽第2回ワークショップ準備会を行うことになった。メンバーは、町会連合会長、地域活性化部会長、福祉対策部会長、防災・環境保全対策部会長、中山地区地域づくりセンター長、公民館長、公民館主事、福祉ひろばコーディネーター、地域づくりインターンの計9名で行った。大学教員にも関わってもらうためどのような内容でワークショップを行うのか、以下の項目をあげて検討した。

- ・「住んでよかったと思える中山地区を目指して」をテーマの下、立てられた基本計画の進み具合の確認をする。3年間活動してきてよかったか、悪かったか確認し、全員で共有する。
- ・基本計画に参画する意味を再認識するために、課題、問題を共有し、住民をどう巻き込むかを考える。
- ・役員が任期を終えても活動に携わり、地域づくりの活動の継続をしていけるように継続の要素を見つける。
- ・中山の地域づくりの必要性を理解(自覚)し活動している人が少ないため、ワークショップで共有する。
- ・中山の良さを再確認する。
- ・3部会ごとに分かれて活動してきているが、それぞれの活動について意見を出し合い全体で考え共有する。
- ・今までの活動で活躍された方、役員を退いた方にも声をかける。
- ・ワークショップを行う前に、ファシリテーションの学習を行う(ワークショップの勧め方、技術講習)。

町会連合会長や地域づくり協議会のそれぞれの部会長は、これまでの地域づくりの取り組みや、これからの取り組みに関してさまざまな想いがあるがゆえに、多くの内容があげられたのだと考えられる。これらの意見をもとに、ワークショップでは地域づくり協議会における地域づ

くり活動のこれまでの活動を振り返り、その成果と課題を基本計画に照らし合わせ、地域づくりに関わるメンバーで共有することを目的とした。そのうえで、外部有識者の考えを取り入れたいという準備会メンバーの意見から、地域づくり専門である松本大学の白戸教授へ協力を依頼することとした。

(3)第3回ワークショップ準備会

日時：平成29年7月19日(水) 18:00~19:00

場所：松本大学

内容：教授とのワークショップの打合せ

第3回ワークショップ準備会は、中山地区からは町会連合会長、地域づくり協議会活性化部長、中山地区地域づくりセンター長、館長、公民館主事、地域づくりインターンの6名。松本大学からは白戸教授、向井専任講師、今村専任講師の計9名で行った。

打合せを行うなかで、白戸教授より以下のようなアドバイスを受けた。

- ・「ワークショップ」という言葉を使うと、みんなが身構えてしまう。最初は、中山のいいところ、悪いところを出し合うような、肩の力を抜いてできるやり方がいい。
- ・「ワークショップ」という言葉は硬いため、別の言い方を用いる。
- ・課題を見つけることを目的にするのではなく、いいところを見つけて、いいところをどうのばしていくかを考えることで、課題も見えてくる。
- ・最初は楽しく、やわらかく行うことが大切。

これらのアドバイスをもとに、ワークショップを気軽に楽しいものとするために以下のようなことを試みることにした。

中山地区には、同好会として活動の幅を広げている「うたづくり同好会」や「ねこつぐら同好会」がある。この2つの同好会は、元々公民館講座で行っていたものが、講座が終わっても継続して活動していきたいという参加者の思いから、同好会という形で住民が主体的に活動を行うようになったものである。「ねこつぐら同好会」は他地区からの参加者が増えつつあり、また「うたづくり同好会」では平成27年度と29年度に自分

達で作った歌を発表する「うたづくり発表会」を開催し、そこでは代表者が仲間と作った「中山は山の中」という地域を意識した歌も歌われている。

このような地域づくり協議会以外で展開されている地域づくりの活動を知ってもらうためにも、「ねこつぐら同好会」と「うたづくり同好会」に活動紹介をしてもらうことにした。また、「中山は山の中」という歌はまだあまり知られていないことから、地域のなかにこのような歌があることを知ってもらう機会とすることと、会場の雰囲気をやかなものとするを企図し、参加者全員で合唱することを計画した。

また、はじめに計画していたワークショップも、参加者が気軽に参加できるよう意見交換会という名前に変え、参加者がリラックスして話ができる雰囲気づくりを意図して、お茶とお茶請けに農村女性協議会の会長が手作りした漬物を出すこととした。

中山地区はこれまで膝をつき合わせ意見を出し合う機会が少なかったため、ワークショップという形だと硬い雰囲気になってしまう可能性が考えられた。後の活動につなげるためにも、参加者が「またやってみたい」と思えるように、まずは集まったメンバーで自由に意見を出し合い、さらに「楽しい」と思ってもらえるような場づくりを心がけた。

意見交換会への参加者としては、先にも述べたように地域づくり協議会のメンバー間での情報共有が十分に図られていないという課題もあったことから、まずは地域づくり協議会のメンバーを対象として開催することとした。

(4)中山地区地域づくり協議会発足3周年懇談会「今までの中山、これからの中山」

・目的

地域づくり協議会発足3周年ということで、今まで行ってきた活動を見直すとともに、部会関係なく活動を邁進してきた方々が、気兼ねなく意見を言い合える場とする。

・経緯

地域づくり協議会で行われている会議では、課題や方針を明確にし、共有し合う機会が少なかった。そのため、「地域づくりは難しい」「これから先の方向性をどう見出せばいいのか」と頭を抱えている役員も見受けられた。参加したメ

ンバーで自由に意見を交わし、普段抱えている想いを共有し合い、地域づくりに対して気楽に考えてもらえるような機会となることを意図し、気軽に中山について意見を出し合える場として、中山地区地域づくり協議会発足3周年懇談会「今までの中山、これからの中山」(以下、懇談会)を開催した。

・当日

懇親会当日の流れは表2の通りである。

当日は、地域づくり協議会メンバーと一般参加者を合わせて29名、中山地区地域づくりセンター職員7名、中央南包括支援センター職員1名、大学教員3名、地域づくりインターン生9名、他地区公民館主事1名の総勢50名が参加した。20代～70代の幅広い年齢層が集まり、それぞれ7～10名程の6つのグループによって意見交換会を行った。

表2 中山地区地域づくり協議会発足3周年懇談会「今までの中山、これからの中山」スケジュール

時間	内容	担当
19:00	1. 開会 あいさつ	久保田連合会長
19:03	2. 中山地区地域づくり活動紹介 ・松本つぐら紹介(5分) ・うたづくり同好会紹介(10分) 「中山は山の中」歌唱	百瀬さん 鈴木さん 全員
19:18	3. 講演(30分～40分) ①グループごと意見交換(30分) 教授の講演を受けて、各グループ意見交換 ②全体で共有(10分) ③質疑応答(5分)	白戸教授
20:45	4. お知らせ	
20:50	5. 閉会 あいさつ	市川副連合会長

以下、グループごとの意見交換で出された意見等について紹介する。

【各グループの意見交換会の内容(抜粋)】

・活性化部会では遊休農地の活用に取り組んでお

り、エゴマや花豆、加工トマトの栽培などを行っている。なかなか大変な仕事。切実に困って始めた事業ではないので、今後どう進めていくか難しい。

- ・活性化部会で色んな作物をつくることにチャレンジした。加工してからの販路が課題。小学校では薬草を取ることをしている。子供が少ないため、地域の大人と一緒に作業をする事で交流できたらいい。
- ・空き家問題は中山ばかりでなく全市的なことと思うが、空き家を探している人が、多数の物件の中で中山を選んでくれるよう、中山は空き家の横に畑がセットであることを売りにしたら魅力のひとつになるのではないか。
- ・地区でのお茶のみ会での情報に「かぎ」がある。
- ・自分でやれることをやるのが地域づくり。なるほどなどと思った。
- ・どんどんやるが出てきて、忙しく頭も回らない。不安になる。もう一度スタートラインに立って自分のやりたいことを考えたい。野菜作りをみんなで仲良くしながら、産業につなげたい。
- ・人の心に火をつけたい、と思ってやっているけどうまくいかない。一緒に楽しく仲間を作ってやりたい。
- ・自分が地域に興味を持たないと。両隣三軒が薄れてきた。
- ・身近な資源を見つけることからしてみたい。
- ・中山の「資源」ってなんだろう。
- ・地域について話し合う場がない。
- ・地域づくりに興味があるが、どのようにしていいのかわからない。
- ・地域と組合が団結して地域づくりができればいい。
- ・運動会も出れば楽しいと思えるような運動会づくり。
- ・役員をやったおかげで行動から意識が変わった。役員をやって、初めは嫌だったが、行動したことでいろいろな発見や、できることがあると気づいた。
- ・役員は任期がきたら入れ替わり。入れ替わりのときに引継ぎがなされていない。バトンタッチがうまくいっていない。
- ・地域のためにではなく、自分のために。地域をどうするのではなく、自分はどうするのか、したいのか。という言葉聞いて、気持ちが楽になった。
- ・耕作放棄地についても地区外の人に貸し出しを勧められないか。

- ・地域住民にアンケート調査。地域に何を求めているのかなどの要望を聞きだし、地域づくり協議会で話し合ってもよいのではないか。
- ・住民全員が関わるイベント等の機会が少ない。減ってきている。

このように、意見交換会ではさまざまな意見が出されたが、普段の部会等の会議では、委員一人ひとりが発言をすることや、アイデアを出し合うような場面はほとんど見受けられず、それぞれの想いも全体で共有するような場面が設けられずにいた。

また、中山の地域性なのか、とても真面目な方が多く、「地域づくり」という言葉に誠実に取り組むあまり、「地域づくり」という言葉に呪縛されているように見受けられた。しかし、役員や住民の方々と個々に会話をしていると、それぞれが自分の住んでいる地域への想いや、やりたいことなどを語ってくれることが多くあった。

今回、このようにメンバー同士が気兼ねなく地域のことを語り、地域づくりへのイメージが少しでも変わることを意図して意見交換会という場を設けたが、想像していた以上に活発に意見が交わされ、それぞれ地区への想いをいきいきとした表情で語っている姿は、とても印象的であった。そこには、元来メンバー一人ひとりが地区への想いを持っていたということもあろうが、懇談会前半に設定した「ねこつぐら同好会」や「うたづくり同好会」の活動紹介や「中山は山の中」の合唱、そして松本大学の白戸教授による講演によるところも大きいと思われる。意見交換会で出された意見からもそのことが推測される。各部会長からは意見交換会でこんなにたくさんの方が意見を言ってくれるとは思わなかったという声も聞かれた。

これまで中山地区においては、膝をつき合わせて意見を出し合う場が少なかったこともあり、今回このような場を設け、今まで口にできなかった自分の想いや考えを出し合うことで、中山地区のいいところや、課題、問題点が今まで以上に増えてきたのではないだろうか。一人で抱えこんでいると、視野が狭くなり、見えるものも見えなくなってしまう。住民が集まり、膝を突き合わせ意見を交わすことで、地区が更に深く見え、また違った方向から地区を見ることができるよう、新しい発見や、活動の発展にもつながるのでは

ないかと考える。

中山地区地域づくり協議会発足3周年懇談会「今

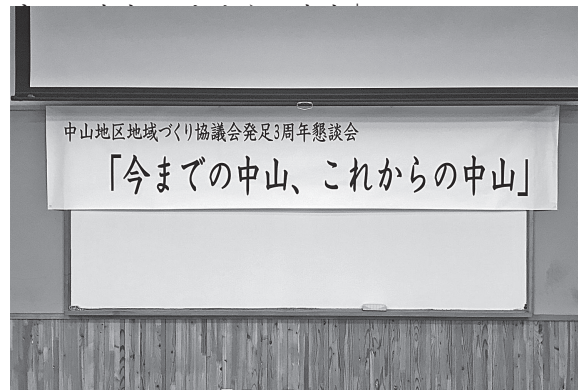


写真4



写真5 ねこつぐら

3-2 地域づくりニュースについて

・目的

中山地区の地域づくりへの取り組みについて、地区住民に知ってもらえるよう、また活動に興味を持ってもらえるよう周知する。

・経緯

地域づくり協議会が発足して3年が経過し、この3年間それぞれの部会でさまざまな活動を行ってきたが、中山地区で行っている地域づくりが住民に認知されていないという声が聞かれた。それはまさに、2-2で述べた課題のひとつである地域づくりに関する情報発信の不足である。そこで、情報を発信していく媒体として地域づくりニュースを発行することとなった。

これまで公民館や福祉ひろばでは別々でお便りを発行していたが、最近は公民館だよりと福祉ひろばだよりをひとつにして発行している地区が増えつつある。そうした他地区の取り組みも参考にしながら、1枚で地区の情報を得られるよう、中山地区でも公民館だよりと福祉ひろばだよりをひとつにし、なおかつそこへ地域づくりニュースも取り入れ、「ふるさと中山だより～住んでよかった中山～」として発行することとなった。

・内容

地域づくり協議会の各部会には広報担当が2名ずついるため、それぞれの部会から活動の記事をあげてもらっている。筆者は、各部会の広報担当があげてくれる記事を取りまとめ、時に編集を加えながら地域づくりニュースを作成し

ている。

また、これまでの公民館だよりや福祉ひろばだよりはモノクロのものを回覧という形をとっていたが、新たに「ふるさと中山だより」を発行するにあたり、内容に関心を持ってもらえるよう、また、いつでも手に取って見ることができるよう、全ページカラーにしたものを全戸配布することとした。

「ふるさと中山だより」を発行してから間もないため、成果としてはまだ目に見えてきていない。しかし、今までと違ってカラーで見やすいという声や1枚でさまざまな情報を得られること、また、全戸配布にしたことにより、住民がいつも手元に置いておける点では町会長や住民からの評価はよかった。

地域づくりニュースは、中山で行っている地域づくりの活動を住民に知ってもらうと同時に、一人でも多くの住民に地域づくりに興味を持ってもらえるようにと平成29年度に初めて取り組んだ事業である。平成29年度は地域づくり協議会で行ってきた活動をメインに掲載してきたが、内容としては活動報告だけになってしまったように思える。住民により興味を持ってもらうためには、活動をしている側の視点や声を届ける必要がある。これからは地域づくり協議会の活動だけでなく、地域全体を捉えた幅広い内容の紙面にしていくことが求められる。そのためには、自ら取材をするなど住民の声も届けられるような紙面を目指すとともに、少しでも多くの住民に中山の地域づくりに興味をもってもらえるような内容を掲載する必要がある。中山地区の情報誌といえば「ふるさと中山だより」と地域の方々に声を揃えて言ってもらえるような、身近な存在となるよう成果を出していきたいと考える。

また、中山地区には住民が作成している「住んで良かった！より良い中山づくり」というホームページがある。ホームページからも情報を得ることができるよう、地域づくりニュースで用いた地域の情報も提供し、さまざまところから中山のことを知ることができるように取り組む必要がある。

3-3 町会・常会でのお茶のみ会について

・目的

町会や、常会単位で気兼ねなく相談し合える場をつくり、住民同士のつながりをつくるとともに、地域の中の困りごとや課題を話し合えるシステムをつくる。

・経緯

地域づくり協議会の福祉対策部会の中で、地域包括ケアシステム構築に向け、公的機関の専門職員による学習会や、各町会や常会によるお茶のみ会の充実、高齢者の見守り活動の検討を行っている。お茶のみ会に関しては、現在実施している各町会のお茶のみ会について回数を増やすことや、内容を充実させるための検討を行っている。こうした取り組みは、地域包括ケアシステムの構築に限らず、住民同士のつながりをつくり、より身近な生活圏でのニーズを掘り起こすきっかけにもなるため、地域づくり協議会が掲げる福祉の推進の取り組みとしての意図も含まれている。

・内容

平成29年度は6町会中、和泉町会、埴原東町会、埴原西町会、棚峯町会の4町会でお茶のみ会を実施した。和泉町会では、中和泉西常会と上和泉常会で毎月1回行っている。

各町会においては、民生委員や町会ボランティアが主体となって開催している。内容としては、住民が集まりお茶をのみながら話をしたり、時には昼食会を開くなどさまざまであるが、体操や工作、カラオケなどを取り入れているところもある。毎月行われている福祉対策部会での会議において、各町会や常会で行っているお茶のみ会での様子や、住民の反応等の情報共有も行っている。

お茶のみ会に参加している住民からは、「一人で家にいると、何もしないで過ごしてしまうが、いろいろやってもらってよかった」という声や、「近所の顔見知りの人たちだけで、気兼ねなく参加できてよかった」、「ぜひまたやってほしい」という声もあがっている。一人暮らしで、デイサービスには通っているが、家から近い場所で近所の人たちと昔の話をしたり、体を動かしたり、毎月の楽しみになっていると話している高齢者もいた。お茶のみ会では、スタッフや参加者がそれぞれ漬物や煮物などを持ち寄り、毎回話が盛り上がる。また、参加者の誕生日月には手作り

のケーキをみんなで食べるなど、ちょっとした心遣いも見受けられた。本年度行うことができなかった町会でも、お茶のみ会を開きたいという声があがっているため、他の町会や常会でのお茶のみ会の様子を福祉対策部会において共有していくことは、今後のお茶のみ会の広がりや



写真7

4. 考察

これまで述べてきた地域づくりインターンとしての実践は、先に述べた4つの課題に向けて取り組んできたものであるが、本章ではその実践から明らかとなったことを本研究の目的である持続可能な地域づくりということと照らして考察していく。

4-1 中山地区地域づくり協議会発足3周年懇談会「今までの中山、これからの中山」

懇談会で行われた各グループでの意見交換会において出された意見等について、「地域資源について」、「地域づくりにおける、仲間づくりやつ

ながりについて」、「地域づくりの捉え方について」、「地域づくりを一体的に取り組むためには」の4つに分類し、考察する。

(1) 地域資源について

- ・ 活性化部会では遊休農地の活用に取り組んでおり、エゴマや花豆、加工トマトの栽培などを行っている。なかなか大変な仕事。切実に困って始めた事業ではないので、今後どう進めていくか難しい。
- ・ 活性化部会で色んな作物をつくることにチャレンジした。加工してからの販路が課題。小学校では薬草を取ることをしている。子供が少ないため、地域の大人と一緒に作業をする事で交流できたらいい。
- ・ 空き家を探している人が、多数の物件の中で中山を選んでくれるよう、中山は空き家の横に畑がセットであることを売りにしたら魅力のひとつになるのではないかな。
- ・ 耕作放棄地についても地区外の人に貸し出しを勧められないか。
- ・ 身近な資源を見つけることからしてみたい。
- ・ 中山の「資源」ってなんだろう。

中山地区は、高齢者元気づくり事業などでさまざまな作物を栽培しているものの、それらを中山地区独自の地域資源として見出せていないことがうかがえる。長年住んでいる住民にとって地域にあるものは当たり前のもので捉えられ、それを「資源」として捉えることは難しい。

しかし、今回のような意見交換会の場をつくることで、地域のさまざまな人達が集まり、地区を語ることにより、また違った視点で地区を見ることが出来る。自分が今まで気づかなかった資源や、地域の課題だと思っていたことが、集まって話し合っていく内に地域の大事な資源だと気づくこともできるのではないかと考える。空き家や遊休農地の増加といった課題と思われるものも、視点を転換することによって資源として捉える様子がみられる。住民が自分の地区に対して思っていることや、日頃感じていることなどを出し合える場をつくることで、地区の現状や課題がより明確に浮き彫りになり、時には地域の課題に触れ危機感も生まれる場合もある。さらに、さまざまな立場の集まりで行われ

るものであれば、また違った地区の見方ができ、新たな地域資源の発掘にもつながると考える。

(2) 地域づくりにおける、仲間づくりやつながりについて

- ・ どんどんやるが出てきて、忙しくて頭も回らない。不安になる。もう一度スタートラインに立って自分のやりたいことを考えたい。野菜づくりをみんなで仲良くしながら、産業につなげたい。
- ・ 人の心に火をつけたい、と思ってやっているけどうまくいかない。一緒に楽しく仲間を作ってやりたい。
- ・ 地域と組合が団結して地域づくりができれば。

地域づくりの活動に取り組みたいと考えたとき、仲間がいないため行動に移すことに難しさを感じ、「やってみよう」と声をあげるのに躊躇してしまっているような場合がある。また、地域づくりの活動を展開していくうえで、他の団体とも連携がうまく取れず一人の人に負担がかかってしまい、継続が難しくなる場合もある。一人ではなく、仲間をつくりながら、地域づくりに取り組んでいけるよう、日頃感じていることなどを出し合える場をつくることは、仲間づくりの第一歩にもつながるのではないかと考える。また、地域づくり協議会だけでなく、地区の中のさまざまな団体との横のつながりをつくることで、更なる活動の展開や、継続性も生まれるのではないだろうか。

(3) 地域づくりの捉え方について

- ・ 自分でやれることが地域づくり。なるほどなと思った。
- ・ 地域のためではなく、自分のために。地域をどうするのでなく、自分はどうするのか、したいのか。という言葉聞いて、気持ちが楽になった。
- ・ 地域づくりに興味があるが、どうしたらいいかわからない。

これまで、地域づくりを真面目に考えるあまり、地域づくりを硬く捉えている住民が多く見受け

られた。中山地区を更に良くしたいという想いが強いからこそだと思われるが、大きな規模で何かに取り組もうと考えるのではなく、自分がどうしたいのかという小さな規模で考えることで、自分がしたいことや、やりたいことの発見につながっていくものと考えられる。そしてこのことは、地域づくりにおける住民の主体性と継続性をもたらすことにつながるのではないかと考える。

(4) 地域づくりを一体的に取り組むためには

- ・ 地域について話し合う場がない。
- ・ 自分が地域に興味を持たないと。両隣三軒が薄れてきた。
- ・ 地区でのお茶のみ会での情報に「かぎ」がある。
- ・ 住民全員が関わるイベント等の機会が少ない。減ってきている。

今回行ったような懇談会や意見交換会、ワークショップなどは地域づくりの場でよく用いられる。このような形が万能かと問われれば必ずしもそうではないが、みんなで考えさまざまなアイデアを出し合うことや、活動の目的を明確にし、全体で共有していくためには有意義な手法だと考える。地区全体を対象とした集まりの中で行われる意見交換会もさまざまな視点で地域をみることができ、町会ごとの顔見知りが集まるお茶のみ会ではより身近な部分での地域の課題を見つけることができる。集まるメンバーや人数によって内容の種類や濃さは変わってくるが、地域づくりを一体的に取り組み、地域づくりの活動を継続的かつ発展させるためには、住民それぞれの気持ちや地域におけるさまざまな情報を共有する場をつくるのが大きな意味を持ちそうである。

地域が一体となり地域づくりに取り組んでいけるようになるためには、こうした共有する場をうまく活用しながら、さまざまな立場の住民を巻き込み、有機的な連携によって活動を展開していくことが必要であると考えられる。

4-2 地域づくりニュースについて

中山地区地域づくり協議会の活動を、住民に知ってもらうために情報発信のツールとして、「ふ

るさと中山だより」を発行するようになったが、そもそも地域づくりにおいて情報発信とはどのような意味があるのだろうか。

近年、新聞や雑誌、インターネット等で、多くの情報が提供されている。特にインターネットやSNSなどの普及で、若者から高齢者まで気軽に情報を得ることができる。地域づくりに取り組むうえでの情報発信を考えた場合、住民に地域の現状や課題、あるいはそれに対する具体的な取り組みを知ってもらうことにより、地域づくりへの理解や活動の輪を広げるための意味を有している。そのため、住民に向かって発信される情報は、ただ単に地域づくりの活動をPRするだけでなく、実際に活動に参加している住民のリアルな声を届けるといった情報提供の手法の創意工夫の如何によって地域づくりへの意識と広がりとは異なってくるだろう。

現在、中山地区の地域づくり協議会のメンバーのほとんどが地域の役員によって構成されており、当然ながら役員の任期満了によって地域づくり協議会のメンバーも変わってってしまう。地域づくりが地域の役員によってのみ取り込まれるものでなく、多くの住民が主体となり、なおかつ継続的に地域づくりに取り組んでいくためにも、地域のさまざまな人材を巻き込み、つなげていかなければならない。

そのためにも、地域づくりに関する情報発信は「ふるさと中山だより」のような広く住民に情報提供するものだけでなく、既存の住民ネットワークを利用し、人から人への「口コミ」による情報伝達も大切になると考える。

4-3 町会・常会でのお茶のみ会について

地域住民にとって、町会や常会といった物理的に身近な場所で開催されるお茶のみ会は、気軽に足を運ぶことのできる居場所となっている。また、それゆえに顔見知りが集まる場所であるため、お互いに気兼ねせず話すことができ、自分が抱える困りごとなども相談しやすいため精神的にも身近な場所となっていると考えられる。地域包括ケアシステムの構築を考えたとき、住民が抱えている困りごとはデリケートな問題ほど発見されるまでに時間がかかる。また、そのような問題ほど「助けてほしい」と声を出すのは難しい。地域の困りごとや埋もれているニーズを掘り起こすために、町会や常会のような身近

な範囲で、住民同士が情報を収集し、共有していくことのできるお茶のみ会のような仕組みは必要であろう。

近年、隣近所の付き合いが希薄になりつつある中で、中山地区のような中山間地は昔からの近所付き合いが根付いており、散歩の途中に近所の友人の家へ寄り、お茶をする姿も見受けられる。「向こう三軒両隣」という言葉があるように、隣近所の付き合いを更に色濃くさせるためにも、気兼ねなく集まれる場所でのお茶のみ会は支えあいの仕組みづくりを構築する方法のひとつでもあると考える。高谷(2011)は、「寝たきりの状況になっても、そばで一緒にお茶を飲んでくれる人(生活の連れ)がいるなら生きていくことを共感し合うこともできるであろう。配食サービスの食事を一人で食べるだけでなく、ささやかな食事であっても、近隣の高齢者・中学生・高校生・大学生らが訪れてそのときの希望に添って調理し、さらに誰かが加わって一緒に食べる。ここに必要に応じてさまざまに変身する「たまりば」が出現する。社会の一員として受容され、寄り添ってくれる人がある、このような関係性を提供するであろう。」と述べている。

高谷が指摘しているように、このようなお茶のみ会は高齢者だけでなく、子供や若者にとっても必要な居場所でもあり、そこに集う人々は地域を担う大事な社会資源としても存在しているといえるのではないだろうか。このようなことから、それぞれの世代が集まり、互いに認め助け合い、互いの良さを共有し合うことで、地域における課題を解決し、持続可能な地域づくりへもつながっていくのではないかと考える。

5. 展望

今後の中山地区の状況を考えたとき、わが国の中山間地全体にも言えることだが、少子高齢化の歯止めはきかず、著しい人口減少が進み、空き家や遊休農地の増加等が今以上に加速することが予想される。そうした中、地域づくり協議会は3周年を迎えたが、来年度は役員が改選となり、地域づくり協議会のメンバーの顔ぶれも変わる。中山地区では、「地域づくり」というものを少し硬く捉えている傾向があったため、本年度懇談会を開催したように、来年度の新しいメンバーでも自由に中山地区について語り合える

場を作っていきたいと考えている。しかし、今行っている地域づくり協議会の活動だけではメンバーも限られ、活動の幅もなかなか広がっていかない。より多くの意見を反映させるためにも、地域づくり協議会のメンバー以外の住民も巻き込んでいく必要があると考える。

また、中山地区はほぼ農村地帯ということもあり、農業に携わっている元気な高齢者が多くいるが、その一方で認知症や閉じこもり等の顕在化していないニーズもある。子供や若者も減少してくる中で、いつまでも住み慣れた地域で安心して暮らし続けていくためには、地域での見守りの仕組みがより一層強化されるよう地域福祉の推進にも目を向けていく必要がある。現在、地域包括ケアシステムがうたわれている中で、地域包括ケアシステムという住民たちにとっては聞き慣れない名前ばかりが先行してしまい、実際にどのような取り組みをしていけばいいのかという部分で理解と実践がなかなか進んでいない状況にある。何か特別なことをするのではなく、地域を基盤としてさまざまな人材が集まり、主体的な見守りや支え合いといった互助の仕組みを構築していくことが、地域包括ケアシステムにつながっていくことを実感できる仕掛けをつくっていく必要があるだろう。

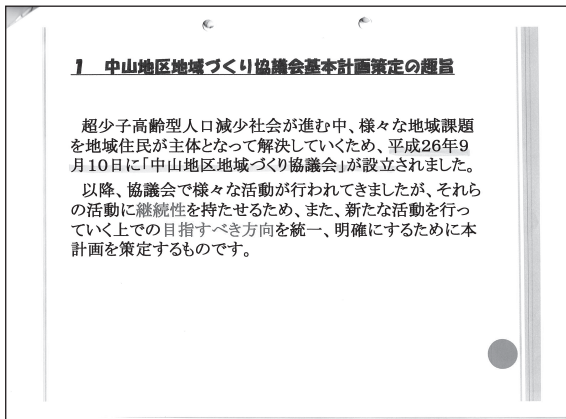
さらなる高齢化と人口減少が見込まれる中山地区であるが、中山の自然や景観などに惹かれ、地区への移住を決める住民も見られる。そうした移住者を巻き込んでいくことで、地域を捉える新たな視点や考え方もたらされ、地域に活力が生まれることが期待される。同時に、それは新たな人材と資源の発掘にもつながっていく。このような取り組みによって、今ある地域のコミュニティをより一層幅広く、強いものにしていくことで持続可能な地域づくりにつなげていくことが地域づくりインターンとしての実践に求められると考える。

参考文献

- ・広井良典(2009)『コミュニティを問いなおす一つながら・都市・日本社会の未来-』ちくま新書
- ・木下勇(2007)『ワークショップ WORKSHOP 住民主体のまちづくりへの方法論』学芸出版社
- ・白戸洋編著(2009)『まちが変わる 若者が育ち、人が元気になる 松本大学生がかかわった松本市のまちづくり』松本大学出版部
- ・高谷よね子編著(2011)『居場所とたまりば「めだかのたまりば」がつくる人と人とのつながり』学文社

[資料]

中山地区地域づくり協議会基本計画 資料



中山地区地域づくり協議会のこれからのを考えるワークショップの企画(案)

中山地区地域づくり協議会のこれからのを考えるワークショップの企画(案)
(地域づくり協議会 全体版)

松本大学地域総合研究センター特別調査研究員
松本市地域づくりインテーン中山地区担当
北原 保奈美

- 開催時期
日時：未定
時間：18時～20時 or 19時～21時
- 場所
大会議室
- 内容
<1部>各部会の活動内容の発表
・松本大学の教員による講演。
・質疑応答
・休憩
<2部>グループ討議(各部会ごと)
・3年間活動してきた成果を出し合う
・課題・問題を出し合う。
・部会ごとに出た課題を基に、できることを出し合う。(方向付けまでできれば◎)
・全体で共有。
・まとめ。
- 参加対象者
各部会の構成団体。
地域活性化部会：正副町会長・町内公民館長会正副・史跡愛護会代表・体育委員長
JA 中山氏所長・JA 青年部支部長・考古博物館学芸員・有識者・個人
福祉対策部会：正副町会長・民生・児童委員・日赤奉仕団分団長・子ども会育成会長
健康づくり推進員会正副・中山 PTA 会長・白ゆり会会長・有識者
個人

防災・環境保全対策部会：正副町会長・民生員・防犯・防災部理事、衛生協議会正副
日赤奉仕団副分団長・中山の環境を守る会会長・消防第7分団正副・有識者・個人

- 会場
中山地区地域づくりセンター 大会議室
- 実施主体
地域づくり協議会

<会場図>

中山地区地域づくり協議会発足3周年懇談会「今までの中山、これからの中山」の開催について(ご案内)

平成 29 年 8 月 17 日

各位

中山地区地域づくり協議会
会長 久保田 信二

中山地区地域づくり協議会発足3周年懇談会
「今までの中山、これからの中山」の開催について(ご案内)

納涼の候、皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。
さて、標題のとおり中山地区地域づくり協議会発足3周年懇談会「今までの中山、これからの中山」を開催いたします。
つきましては、下記のとおりご都合お差し繰りいただき、御参加をお願い致します。

記

- 趣旨
地域づくり協議会が発足3周年となりました。これまでそれぞれの立場で地域づくりの活動に邁進されてきた中で、感じてきたこと等を、今回のテーマでもある「今までの中山、これからの中山」について気軽に意見交換ができるよう、大学の教授による講演会と意見交換会の開催に至りました。
- 日時
平成 29 年 9 月 14 日(木) 19:00~21:00
- 場所
中山地区公民館 大会議室
- 内容
(1) 中山地区地域づくり活動紹介
・松本つぐら紹介
・うたづくり同好会紹介
(2) 講演
松本大学 白戸 洋 教授
(3) 意見交換会

事務局：中山地区地域づくりセンター
(担当) 藤森・北原
TEL 58・5822

中山地区地域づくり協議会発足3周年懇談会「今までの中山、これからの中山」次第

中山地区地域づくり協議会発足3周年懇談会
「今までの中山、これからの中山」


日時 平成 29 年 9 月 14 日(木) 午後 7 時~
場所 中山公民館 大会議室

次 第

- 開 会
- あいさつ
- 内 容

時間	内容	担当
19:00	1. 開 会 あいさつ	久保田連合会長
19:03	2. 中山地区地域づくり活動紹介 ・松本つぐら紹介(5分) ・うたづくり同好会紹介(10分) 「中山は山の中」歌唱	藤森館長 百瀬さん 鈴木さん 全員
19:18	3. 講 演 (30分~40分) ①グループごと意見交換(30分) 教授の講演を受けて、各グループ意見交換 ②全体で共有(10分) ③質疑応答(5分)	白戸教授
20:45	4. お知らせ	
20:50	5. 閉 会 あいさつ	市川副連合会長
- お知らせ
- 閉 会

「中山は山の中」 歌詞



中山は山の中

作詞：鈴木 幹夫
作曲：川崎 早次

- 1 ならかな坂を ゆっくりと
トラクターが のぼってゆく
子どもたちに 手を振る
荷台に乗った おばあさん

子どもたちも 手を振って
ヒマワリの咲く 通学路
Tシャツ姿の 高校生
転がるように 自転車こいで


※山の中だよ 中山は
肩を寄せ合うように
みんなで 生きている
- 2 ヒマワリは空に 伸びている
空に浮かんだ 雲を抱いて
北アルプスが 見下ろしている
夏の太陽が 照りつける

照りつける 日差しを避って
木の陰で休む おばあさん
丘の上の 中学校
ブラスバンドが 聞こえてくる

※くり返し
- 3 山のとっぺんに 月が浮かぶ
小さな飲み屋に こぼれる灯り
仕事を終えた 男たちが
ビールを飲みながら 語り合う

きまって話題は この村のこと
年老いた親と 子どものこと
まだ明日も 頑張るか
月夜の道を 帰ってゆく

※くり返し



地域づくりニュース

平成 29 年 10 月 1 日発行 第 3 号

ふるさとなかやまだより

～ 住んで良かった中山 ～

曇りも和らぎ、周りの木々もだんだんと色づき始めてきました。爽やかな秋がやってきますね。
秋はイベントがたくさんあります。ぜひ、お出掛け下さい。



生かがいづくり事業
健康づくり事業

トマトと蕎麦の収穫。昨年を上回る収穫量です。蕎麦は5月播き、6~7月間引き後定期的な除草を実施し収穫となりました。花豆、エゴマの栽培も行なっていますが、生かがいづくり、健康づくりに通じた活動を今後も模索していくこととしています。

7月~8月の朝、榊公園でラジオ体操を行いました。小学生の児童を含め子供達は30人以上、大人も20人前後参加しました。

8月20日NNGP中山東花園との共催で、ライブイベントを開催しました。
習字農業体験に日頃から参加している親子連れや地元住民など140人が、松本平を見渡す雄姿の坂で音楽鑑賞に耳を傾けていました。特設ステージでは中山を拠点に音楽活動を続けているユージ(斉藤)さんのギター演奏と、モンゴル楽器・馬頭琴のフコ美有実(Micho)さんはキーボードやドラムの演奏に合わせてモンゴル民謡やオリジナル曲を奏でました。
会場には地元産の夏野菜カレーを食べ楽しいひと時でした。

* 中山地区地域づくりの情報は、
<http://chikinakayama.wixsite.com/chilikitop>

住んで良かった中山 地域づくり 検索

パソコンでも検索できます。